

ときを積む



1

1_ 地元上林の法蓮寺の石垣は宇吉さんの弟子によって作られた。大きな石が今でも崩れることなく組み立てられている



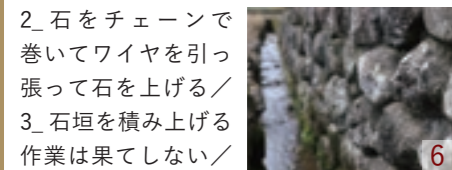
2



3



5



6

2_ 石をチェーンで巻いてワイヤを引っ張って石を上げる／
3_ 石垣を積み上げる作業は果てしない／
4_ ウインチという道具を使って作業をする／
5_ 菅能宇吉さん（前列真ん中）と菅能朋近さん（後列左）／
6_ 森光夫さん宅には今も宇吉さんの弟子が積んだ石垣が並ぶ。数十年前の上林には田んぼや川の護岸はすべて石垣でできていた
※写真2-5：大塚早紀さんから提供

全国数々の石垣を積み上げた「大石つかい」の伝説

昭和中期、戦争によって城の石垣が次々と壊れ、上林の一人の石工に声が掛かった。壊れた石垣の石を一つひとつ積み上げ、完璧に修復したことは今も伝説となって上林の人々に言い伝えられている。

菅能宇吉さんは上林地区に生まれ、生涯で松山城、高知城、大洲城などの石垣を修復してきた。中でも、80歳のとき、太平洋戦争の空襲で大阪城京橋口の乾櫓の石垣が破壊され、大きな被害を受けたときには、堀底に落ちた石と新しい石を合わせ約250個の石を組み合わせ、石垣を復活させた。

石垣積み腕は反りに表れる。コーナーに入れる隅石の配置は高くなるにつれ難しくなる。大阪城は高いところでも30mほどあるが、繊細な技術を駆使して美しい反りを実現させた。

宇吉さんの息子朋近さんも共に石工として生涯にわたって石垣を積み上げた。大きい石は750kg以上にもなり、一度据えたら積み直しづらく、

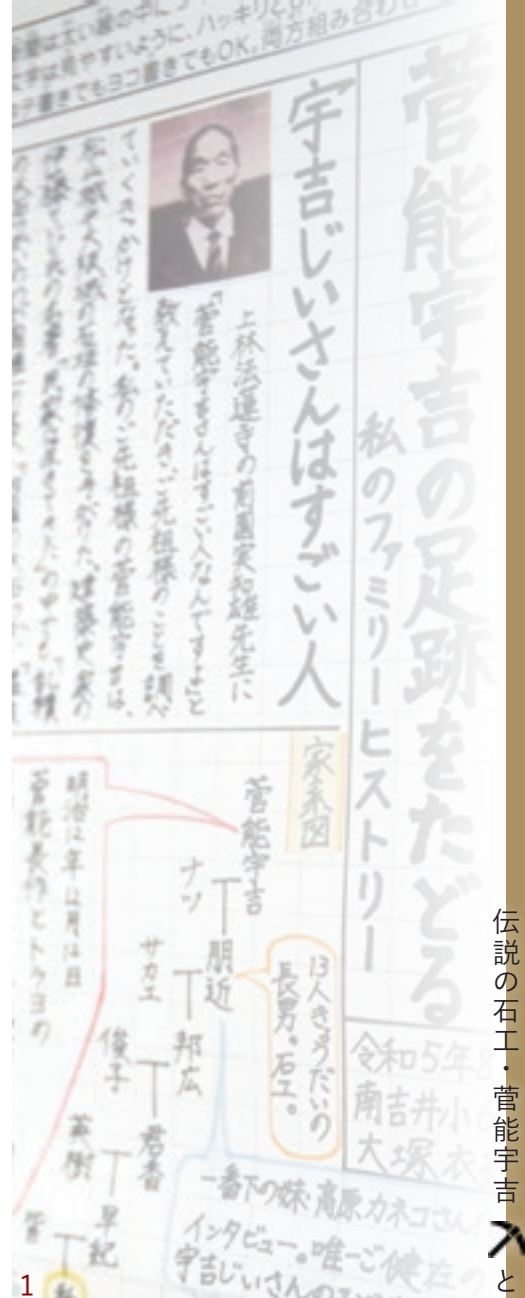
扱いにくい。しかし、宇吉さんは熟練の技とさまざまな道具を使いこなしながら石を積み上げ、いつしか全国から「拝志の大石つかい」と呼ばれるようになった。

菅能宇吉さんや朋近さんと由縁がある

森 光夫 さん
もり みつお

石積みが一番よく見えるのがお城です。いかに丈夫な石垣を組むかが大変重要でした。インターネットがない時代に宇吉さんが「大石つかい」として全国に技術が広まるのが不思議ですが、石工としての技術がそれほど高かったのではないかと思います。偉業を成し遂げた宇吉さんは私たちにとって誇りです。





伝説の石工・菅能宇吉のときを積む

上林の道を拓く

全国数々の城の石垣を築いた石工・菅能宇吉。才能は地元でも発揮された



2



4



5



6



7

1_大塚衣織さんが菅能宇吉さんの功績を新聞にまとめた／2_宇吉さんにゆかりのある皆さんが集まって当時の資料や写真を見て昔を振り返る／3_宇吉さんの末娘高原カネ子さんが宇吉さんが生きた時代を思い返す

4_現在の大阪城。大塚さんが家族で訪れ、撮影した／5_当時の様子を鮮明に思い出す。かけがえない時間に／6_宇吉さんの末娘高原カネ子さんを筆頭に、ゆかりのある人たちの顔ぶれが揃った／7_松山城には当時石垣を修復した宇吉さんたちの名前が今も刻まれている



菅能英樹さん
宇吉さんの子孫で上林在住
かんのうひでき

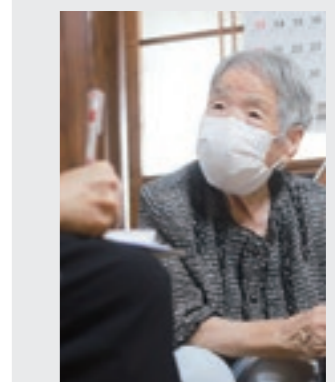
宇吉さんの生涯を辿っていくうちに、これだけの功績を残した素晴らしさを感じます。上林の子どもたちも先生もみんな宇吉さんのことをたくさん調べて、誇りに思っていることが何より嬉しいです。孫や子どもたちにも伝わり、おじいさんの活躍を誇りに思っています。家族みんなで感謝しています。

中玄能
岩を砕くハンマーのような役割。岩を叩いて石を安定させる。

中玄能 (先が鋭利)
先が鋭利なものは、より繊細に石の形を整えることができる。

鑿 (のみ)
玄能で叩いて石を砕く道具。重量もかなりのもの。

ショウセン・ダイセン
岩の配置を決めるとき、吊るした岩を回すときに使う道具。長さが長いほど大きな石を操れる



宇吉さんの末娘
高原カネ子さん
たかはらかねこ

仕事に厳しい宇吉さん

「宇吉じいさんは仕事には厳しかった」と菅能宇吉さんの末娘のカネ子さんは話す。

大洲城のやた櫓の石垣は脇川に面するため、石垣の高さが出るように修理をした。宇吉さんは城の特性を活かして石垣を積む細かな技術とこだわりを持っていた。「当時はウインチで巻いて、石を動かしていました。宇吉じいさんが『強く巻いて』『弱く巻いて』と合図をするのを聞き逃してはいけませんので、作業中はよそ見ができませんでした」とカネ子さんは笑う。

道やせきをつくり上げる

宇吉さんは城の石垣づくりだけでなく、上林地区の林道づくりにも尽力した。

当時の道路づくりは苦労が絶えない。土だけでは雨で流れ緩くなってしまうため、山の石を細かく砕いて道にした。「当時は手袋やヘルメットがなく常に危険と隣り合わせ。大きい石が出たら、穴を開け、線を入れて火をつけて石を割る。農作業中の人に火花が合図をしたり、火をつけたりする指揮は宇吉じいさんがとっていました」

仕事をつくる

「林道をつくっていた当時、近所の人たちが石を砕く役目を担っていました。砕いた石を枡に入れた分だけ、宇吉じいさんや朋近さんが賃金を渡し

ていました。当時は上林に仕事はほとんどなかったのですが、人々もみんな喜んで働いていました。松山城の石垣修復のときは車がなかったため、城近くに小屋を作っていました。寝泊まりをしていた。「あるとき、朋近さんの娘さんが修学旅行で大阪を訪れたとき、大阪城で宇吉じいさんたちが石を積んでいたところを見たそうです。子どもたちにとっても憧れの存在でした」

「仕事に厳しかったですが、仕事終わりにいちご水を買ってくれたことは今でも忘れられません」とカネ子さんは笑みを浮かべた。



ファミリーヒストリーを新聞に
大塚早紀さん **衣織**さん
おつかささき・いおり

3年間かけて作った私のファミリーヒストリー。昔から「すごい先祖の人がいる」と聞いていましたが調べてみると、より素晴らしさを感じました。松山城で宇吉さんの名前が石垣に刻まれているのを自分の目で見たときは心を揺さぶられました。実際に石垣を見に行ったり調べたりするうちにもっと興味が出てきたので、これからも調べ続けたいです。



地域の読み聞かせボランティア
大西 三笛 さん
おおいし みふえ

上林小学校で定期的に読み聞かせをしています。今回のお話をいただいたときに初めて菅能宇吉さんのことを知りました。石垣や道をつくった宇吉さんたちの功績は素晴らしく、誇りに思います。小学生にも、宇吉さんたちの素晴らしさをしっかり伝えたいと読み聞かせをさせていただきました。子どもたちの心の中に響いてくれるものがあればいいと思います。

そして、上林の子どもたちへ

石工・菅能宇吉が残した石垣や道路は今もそれぞれの場所で生きている



地元を学ぶ

上林小学校のふるさと学習の授業では、地域の人やものに触れ、昨年度は地元ゆかりの物語を学芸会で披露した。今年の上林のまちを実際に歩いて回った。

5・6年生は昨年度から地域の人に菅能宇吉さんのことを教えてもらい、学習に取り入れている。これまでの授業で、宇吉さんや朋近さんの当時の姿を資料などで調べてきた。

上林に住む人が伝えたい宝

11月9日、上林小学校5・6

に昔は石積みの景色が広がっていたことを教えてもらった。さらに、宇吉さんや、朋近さんの生涯がさまざまな文献やインタビューをもとに書かれた資料「上林が生んだ伝説の石工菅能宇吉」を地域の読み聞かせボランティア大西三笛さんが読み上げた。

カネ子さんのインタビューなどが紹介された後、マップिंगを作成。「今日新たに知ったこと」の軸には模造紙に収まりきれないほど付箋が並んだ。今回の授業で宇吉さんの生涯をさらに深掘りした子どもたちから「学芸会で披露したい」と前向きな発言もあった。

上林から伝える

授業で使った資料は上林小学校の教諭と児童で作った学習教材「ふるさと上林」に綴られている。教材は今年の学習を踏まえ「私たちの誇り上林」にバージョンアップされる。授業を担当した岡山ひとみ教頭は「『上林は誇り』と地域の人たちから聞くと、子どもたちの表情は変わり、上林に残りたいことを本気で考えるようになりました。ふるさとへの愛着が一層深まった子どもたち。これからも地域との繋がりが、本物と出合う学びを大切にしたい」と話した。



上林小学校6年生
尾崎蓮 さん
おさきれん

挨拶をするといつも地域の人たちが返してくれる上林のことが好きです。

今日の授業で石垣の積み方やどんな道具を使ったのか聞けてよかったです。低学年のみんなや次入学してくる1年生に宇吉さんのことをもっと知ってもらいたいです。

学芸会の劇や新聞を作ったりすると未来の上林に残ると思います。来年は中学生になるけれど、5年生が下級生に宇吉さんのことを伝えてくれたら嬉しいです。



上林小学校5年生
菅野由芽 さん
かんのゆめ

菅能英樹さんや森光夫さんに新たなことを教えてもらったのが嬉しかったです。

マップिंगにも今日知ったことをどんどん書いていけたのでよかったです。1～4年生からわからないことを聞いたので、みんなが納得できるようなマップिंगが作れたらいいなと思いました。

石積みにはいろいろな種類があることを授業で教えてもらったのでみんなに伝えたいです。